OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	奥の細道ところどころ（一）
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1950, 1, p. 26-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68363
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

奥の細道ところどころ（一）

小島吉雄

一、そぞろ神

芭蕉の「奥の細道」の中から、解釈上、問題になるところどころを拾ひ出して、私見を加へてみようと思ふ。まづ、冒頭の一節、

去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白川の関こえんとそぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず

といふところを取りあげてみる。この文中従来問題になつてゐるのは、「春立てる霞の空に」といふ語が、「白川の関こえん」にかかるのか、或はまた「心をくるはせ」を修飾するのかといふことと、「そぞろ神」といふ語が、「そぞろ」といふ副詞と「神」といふ名詞との二語に分つて考ふべきか、或はまた「そぞろ神」といふ一語の名詞と解すべきかといふことであつて、現状では今申した両説が並び行はれてゐて、未だ決着を見ない状態である。

ところで、「春立てる霞の空に」は「白川の関こえん」にかかるのが至当であると強く主張せられるのは、志田義秀博士であるが、同博士の「奥の細道・芭蕉・蕪村」といふ書物を見ると、その理由として二つのことを挙げてをられる。その一つは、「春立てる霞の空に」を「心をくるはせ」の方へかかるものとすると、ここの所は文章として甚だ無理な構成のものとなり、拙劣な文章といはざるを得ないといふのである。そして、その二つは、杉風自筆の懐紙や芭蕉の書簡によれば、芭蕉ははじめ春霞の頃に白川の関を越えようと予定してゐたのであつたが、のちに予定を変更したのであつて、この「春立てる」云々の文章はその最初の予定を述べてゐるのであると見るべきであるといふのである。一往は筋のとほつた説であるから、近ごろの注釈書の中には、この志田説に従ふものも尠くない。しかし、形式文法の上では、「霞の空に」は「白川の関こえん」にかかるとも、また「そぞろ神の心をくるはせ」にかかるとも両様に見得るので、そこに問題が生じるのである。

日本文の構成の常道からいへば、副詞的修飾語はその直ぐ後に続く述部を修飾するのが普通であるが、時によつては必ずしもさうでない。ここの文章でも、「白川の関こえんと」は挿入句と見得るのであつて、「霞の空に」から「そぞろ神の物につきて」以下へ続けても決して無理な文法的構成だとは言へない。むしろ、その方が文章心理の上からは自然であるとも考へられるのである。すなはち、「去年の秋」から「年も暮れ」と受け「春立てる」と続くのであるから、その点に重点を置いて考へると、年が暮れて春になり、旅心そぞろなるものがあるといふ風に解釈する方がよろしいやうである。また、「春立てる」といふ表現

にも注意しなければならない。「春立てる」といふと、既に春が立つてゐるのである。志田博士の説のやうに予定をいふのであれば、「春たつ霞の空に」もしくは「春たむ霞の空に」といふのが普通である。西鶴の文章には「春立つ霞の空に」といふべきところに、「春立てる」といふ言ひ方をするやうなことが屢あるけれども、芭蕉の文章ではさういふ特異な表現は他に見当らないから、芭蕉としては「春立てる」といふのは、春となつたといふ既定の事実を言はうためのものであると考ふべきであらう。さうすると、この一句は現在すでに春となつてゐることを言ふのであるから、この点からも、「白川の関こえん」にかかるよりも、「そぞろ神の」以下にかかるものと見た方がよささうである。そして志田博士の「芭蕉は春の頃に白川の関を越えようと予定してゐた」といふ事実と、ここの文意とは切り離して考へて差支へないものである。蓋し、文の解釈といふものは、まづ表現せられた文辞そのものに即して行はれねばならぬ筈だからである。そして、また、一つの句といへども、全文との関聯に於て考へらるべきものであるからである。

次に、「そぞろ神」の問題であるが、「そぞろ」を副詞と見て「くるはせ」にかかるといふのは、また志田博士の説であるが、同様の解釈は既に古く「奥のほそ道解」にもあるので、同博士の創意といふことは出来ないが、この説にくはしい組織だつた理由を附与せられたのは、博士の手柄である。ところで、志田博士に言はせると、「そぞろ」といふ語は主観的な気持を表はす語で、客観的な「神」といふ語には熟しさうもないものであり、又「そぞろ神」といふ語は恐らく用語例のない語で、用語例のない語を芭蕉が使つたとするには、それはさう見るより外に解釈のつかない場合に限らるべきで、ここのやうに、さう見なくても解釈のつく場合は、用語例のない語を使つたと見る方を誤りとしなければならないといふのである。そこで、この志田説の当否を吟味しなければならないわけであるが、「そぞろ」といふ主観語が「神」といふ客観語に熟しさうもないといふ第一理由は、これは間違つてゐるといふことが出来る。「そぞろ」といふ語が客観的な語に熟する例は他にいくらでもあるので、たとへば、「そぞろ雨」「そぞろ歩き」等いくらでも挙げることが出来る。これに反して、その文章中に「そぞろ」を副詞として使用する場合には、芭蕉は一二の例外を除いては大抵「そぞろに」といふ形を使つてゐる。「奥の細道」にもやはり「そぞろに」といふ語を例外なしに使つてゐる。従つて、「そぞろ神」の「そぞろ」を副詞と見ない方が、芭蕉の用例にかなつてゐるやうだ。

それでは、「そぞろ神」といふ用語例は他にもあるかどうかといふと、享保七年の「鹿子の渡」に「そぞろ神のものに狂」ひといふ言葉がある。これは既に志田博士も挙げてをられるのであるが、「奥の細道」より以後の俳書であるから、この文は「奥の細道」の影響によつて生まれたものであらうと推定してをられる。「奥の細道」に影響せられたものだとすると、この「鹿子の渡」の「そぞろ神」は今の場合の例証とはしがたいのである。しかし、わたくしの友人の木曾幸子氏のお母さんは大和の産であるが、時々この「そぞろ神」といふ言葉を話語に使用せられたさうである。思ふに大和地方には方言として、この語が最近まで残つてゐたらしいのである。或は今でもこの語が使はれてゐるかも知れないが、す

くなくとも大和地方の古老の言葉には残つてゐたのである。大和地方の方言にこの語があつたとすると、芭蕉時代にこの語が一般に使はれてゐなかつたとは言ひきれないのである。廣く文献を渉猟すれば、芭蕉以外にもこの語の用語例が発見せられさうである。雪鈴の「入日記」には、惟然坊が形見の澁笠の銘に、

炎天にあるき神つくうねり笠

とあつたと書いてゐる。また元祿十六年刊行の「草刈笛」にも「あるき神」の句がある。杉浦正一郎氏に聞くと、古俳書にも、「あるき神」といふ題のがあるといふ。かういふ風に「あるき神」といふやうな熟語があある以上、「そぞろ神」といふ熟語もまたあり得ると思ふのである。

それから、ここのところの「奥の細道」の文章は、「そぞろ神の物につきて心をくるはせ」と「道祖神のまねきにあひて取る物手につかず」とが対句的表現になつてゐるのであるから、「道祖神」に対して「そぞろ神」が対句的用法でなければならず、従つて、この点からも「そぞろ神」は一語の名詞と見なければなるまい。「そぞろ神」を二語と見る説は棄てられねばならぬ。

最近に出版せられた宇佐美喜三八氏の「全釈奥の細道」は、高校生相手の注釈書たることを標榜せられた書であるが、近来稀に見る良心的著述であつて、最近のこの種の「奥の細道」注釈書中の白眉であると思ふ。同書には、以上わたくしの述べて来た解釈上の問題を論じて、わたくしと同じ結論をしるしてをるが、書物の性質上、その結論へ導く過程を詳述してをられないから、まづ筆はじめにここに取りあげて駄足を加へてみた次第である。

二、早加といふ宿

次に、

ことし元祿二とせにや、奥羽長途の行脚ただかりそめに思ひたちて、呉天に白髪の恨みを重ぬといへども、耳にふれていまだめに見ぬさかひ、もし生きて帰らばと定めなき頼みの末をかけ、其の日漸く早加といふ宿にたどり着きにけり。

といふ文章であるが、考へてみれば、この文章も実にむつかしい文章である。第一に「重ぬといへども」の「いへども」が問題である。また、「耳にふれていまだめに見ぬさかひ」の次の句への続き具合が、分つてゐるやうで、分らない。「頼みの末をかけ」といふ言ひ方なども、普通ではない。文の語勢を重んじて、語の省略が施されてゐるからである。従つて、この辺の文の構造を的確に説明するとなると、なかなか難しい。しかし、ここでは、さういふ問題はあと廻しにして、まづ、「其の日漸く早加といふ宿にたどり着きにけり」を採りあげてみようと思ふ。

「早加」は、いふまでもなく、埼玉縣北足立郡草加町である。この文章には、草加に宿をとつたと明記してゐないけれども、漸くたどり着いたといふのであるから、暗にここに一宿した意を寓してゐると解せられる。ところが、曾良の随行日記を見ると、この日は、草加にとまらずに、粕壁にとまつたのである。すなはち、実際は、粕壁に泊つてゐながら、宛も草加に宿したが如き書きぶりをしてゐるところに問題がある。

曾良の随行日記と「奥の細道」の本文とを比べてみると、相違してゐる点がすくなからずあることは、周知のことであるが、その相違してゐる箇所を仔細に調査してみると、一つは芭蕉の記憶のあやまりと思はれるものと、いま一つは、意識して故意に筆を曲げて事実どほりに記述しなかつたと見るべき部分とがある。たとへば、随行日

記では四月一日に日光山麓に泊つてゐるのを、芭蕉は三月三十日日光山の麓に泊ると書いてゐる。元祿二年は三月は小の月で二十九日までしかなかつたのであるから、これは明らかに芭蕉の間違ひであるが、これなどは芭蕉の思ひ違ひといふものである。しかし、松島から石の巻への道中の記事に「人跡まれで、猟師や木こりの通ふ細道をたどつて道に踏み迷つた」といひ、石の巻に着いて宿をからうとするけれども、更に宿かす人がなかつたと述べてゐるのなどは芭蕉の曲筆である。芭蕉の通つた石の巻街道は宿場の施設もある大道であつたし、その途中に出会つた五十七八の人から石の巻での宿を紹介してもらつてもゐたのである。こんなのは、どう考へても芭蕉の記憶あやまりといふことは出來ない。ところで、この草加どまりの件は、そのどちらに属すべきものなのであらうか。

「奥の細道」の記事のうち、芭蕉の記憶のあやまりと見るべきものは、案外にすくないのではないかと、わたくしは考へてゐる。といふのは、この旅行に於ける芭蕉の年齢は四十六歳であつたし、この紀行文をものした時は、最も降つて考へても元祿七年であるから、いくら病身早老の芭蕉であつたとしても、四五年前の記憶を全然喪失してしまふほどに耄碌してゐたとは考へられないからである。出発の最初の日に、どこで泊つたかぐらゐのことは、われわれの経驗に照らしあはせて、芭蕉もはつきりした記憶を有してゐたことと思はれる。とすれば、この草加泊りの記事は、芭蕉が行文上意識して事実を潤色し曲筆したといふことになる。「奥の細道」の旅程を調査すると、芭蕉は平均一日九里余を歩いてゐるから、それから考へても、粕壁どまりの方が妥当である。然るに、その事実を曲げて、何故に草加にとどまつたことにしたのであらうか。そこに問題があるのである。

さて、「奥の細道」には、さきにあげた文章の続きに、

痩骨の肩にかかれる物まづ苦しむ

といふ文があつて、旅行用具や餞別の品々が路次のわづらひとなつたといふことを述べてゐる。その一節と、「漸く草加といふ宿にたどり着きにけり」の「漸く」とは互に照應してゐるのであつて、痩骨の肩にかかつた荷物のために苦しい思ひをしたからこそ、漸くのことで草加まで辿りついたといふことになるのである。それから、その前段に於て、芭蕉はまた「行く道なほすすまず」としるしてゐる。すなはち、それとも文意を照應させなければならない。だから、一日に僅かの道のりしか歩けなかつたことにしないと都合が悪いので、それを事実どほりに粕壁まで行つたことにしては、「行く道なほすすまず」の言葉も生きて來ないし、「漸く」の語を生かすことも、荷物に苦しまされたことを強調することも出來ない。芭蕉は、すでに、「上野谷中の花の梢又いつかはと心細し」といひ、「前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそそぐ」としるし、また、「もし生きてかへらばと定めなき頼みの末をかけ」と述べて、今度の旅路の心細さをしきりに語つてゐるのであるが、ついで「痩骨の肩にかかれる物まづ苦しむ」といひ、「さすがに打ちすてがたくて路次のわづらひとなれるこそわりなけれ」といふのも、つまりは旅のあはれを強調するためのものであつて、從つて、「その日漸く早加といふ宿にたどり着きにけり」も、やはりその旅の心細さ、あはれさを語る一環中のものでなければならない。

しかうして、芭蕉が特に草加といふ地名をここにあげしるした所以は、恐らくは、その語呂と語感とが彼の趣味に合つたからであらう。